

氏名・（本籍地） 伊藤淑子（栃木県）
学位の種類 博士（文学）
学位記の番号 乙第94号
学位授与の日付 令和元年9月25日
学位論文題目 響きあう声：アメリカ文学における女性の表象と抗拒の言説
論文審査委員 主査 星川啓慈
副査 田中俊之
副査 荒このみ
副査 有賀夏紀

伊藤淑子氏 学位請求論文審査報告書

「響きあう声：アメリカ文学における女性の表象と抗拒の言説」

論文の内容の要旨（1200字以上）

本論文の内容（全体の要約）

本論文の原点にある著者の問いは「抑圧と制約のなかで、人はどのようなことばを発し、どのような声を獲得し、主体であろうとどのようにもがくのか、人格的存在であると訴え、その認知を得るために、どのように闘うのか」というものである。

サブタイトルの中に「女性の表象と抗拒の言説」とあるように、「女性」が本論文の中心に据えられている。著者は、その女性／女を「環境に適応しつつも抑圧に対して抵抗を示し、不本意な表象に包含されることを拒み、主体性の表明を模索しつつける存在のあり様の出現の一つ」としてとらえ、「女性／女を規定する言説」と「女性／女による抗拒の言説」という2つの方向から文学を読み直すことを目指している。

本論文は、サブタイトル「アメリカ文学における女性の表象と抗拒の言説」からわかるように、アメリカ文学に中心を置いているが、ヨーロッパ文化のアメリカへの影響、さらに20世紀以降の世界に対するアメリカの種々の影響もあり、広い範囲の作品に言及することにもなった。その結果、批判はあるが、欧米の諸作家・研究者の枠を超えて、日本の平塚らいてうまで言及されている。女性が発しようとした声（実際には発せられなかった声もふくめて）は、世界のどこにおいても聞くことができるのだ。このような広範囲の作品への言及は、近年注目されている女性作家たちの「ジェネアロジー」（系譜）の視点と重なる研究姿勢の反映ともいえよう。

「ブリコラージュ」（包摂的分析）という手法を駆使するがゆえに、本論文の「議論の流れ」はやや追にくい嫌いもあるが、これを整理すると次のようになるだろう。すなわち、本論文は、(a)バルト、イーザー、モリソンなどの「テキストを読むという行為」をめぐる議論を前提にしながら、(b)ジョンソンの「ブリコラージュ」、コーネルの「ペルソナ」と「イマジナリー・ドメイン」などの種々の理論を分析の導きとし、(c)フェミニズム批評ならびに読者反応批評を応用することによって読解の視点を移動させ、文学のなかにあるジェンダーの偏向性を脱構築するものである。

本論文の内容（各章の要約）

以下では、論文の目的や問題意識などについて書かれた「序章」と、論文の内容の振り返りや結論などが書かれた「終章」に挟まれた、各章（第1章—第9章）の内容について述べる。

第1章では、まず、「フェミニズム」という言葉が出現する以前の時代も含めて、「どのように女性の権利の主張が言論として起こり、それがどのように継承されてきたのか」が確認されている。つぎに、フェミニズムの流れが「どのように文化的な境界を超えて広がっていったか」、換言すれば、フェミニズムの視点から見た「ヨーロッパとアメリカの思想的な相互関係、欧米と日本の影響関係」が論じられている。当然ながら、それぞれの歴史的・社会的・文化的背景のなかで、

それらに連動してフェミニズムも独自の展開をみせるが、同時に、女性の権利を求める言説には「レトリック」の類似性もある。そこで、フェミニズムとレトリックの繋がりについても考察がなされている。

第2章では、「第一波フェミニズム」の主要な訴えであった女性参政権が欧米で達成されようとするころに執筆されたとされる、アーネスト・ヘミングウェイの遺作 *The Garden of Eden* (1986) が、主人公的人物の妻として登場するキャサリンに焦点をあてて分析されている。編集者の手が入った作品は「誰が本当の作者であるのか」を曖昧にするが、バルトやイーザーの理論における「読者の役割」を踏まえ、この遺作の読み直しが試みられている。ヘミングウェイによって生まれ、編集者によって加工されたキャサリンがどのような「ペルソナ」となり、どのような声を発したのかを検討するのは、(ヘミングウェイを理解するためではなく)「フェミニズム批評」の読解の可能性を探るためである。すなわち、その目的は「作者であるヘミングウェイの意図を超えて成立する語りの構造を考える」ことである。

第3章では、ナサニエル・ホーソーン *The Marble Faun* (1860) に描かれる女性像が分析されている。ホーソーン *の* 描く女性登場人物たちには「脆弱で無垢な女性」と「強靱で知性的な女性」という二極性が見られることも多いが、知性的な女性像の描写には、同時代のマーガレット・フラーの影響がうかがえる。具体的には、(1)アメリカのフェミニズムの先駆者である、フラーを投影すると思われる女性登場人物たちが「作品のなかでどのような役割を果たしているか」、あるいは、(2)権利から疎外された無防備な女性登場人物たちが「どのようにホーソーン *の* 作り出す物語空間を生きていくのか」をめぐって、議論が展開されている。さらに、ホーソーン *が* 作り出した女性像から、彼の目論見(彼が与えた仮面)とは異なるペルソナを通過して「なおも輝くもの」が探られている。

第4章では、ホーソーン *の* 知的な女性たちのモデルにもなったといわれる、フラーのフェミニズムの論理的戦略とレトリックが分析されている。具体的にいうと、「当時の女性に対する規定にフラー *が* どのように対抗したのか、そのためにどのようなペルソナを作り出したのか」が考察されている。19世紀前半のアメリカは、イギリスからの文化的な独立を果たすためにヨーロッパの啓蒙主義思想を集約的に活用しながら、「超絶主義」というロマンティズムを生み出すが、フラーは、一方で、その潮流のなかで超絶主義の言説を吸収しつつも、他方で、女性であることによって受ける制限や規範に異議を唱えている。すなわち、フラーはギリシャ・ローマ時代にまでさかのぼり、啓蒙主義が決定づけようとする言論的で制度的な男性支配を反証しようとするのである。そのさい、「ペルソナの手法」が用いていることに注意が払われている。

第5章では、再度ホーソーン *の* 作品から、その代表作とされる *The Scarlet Letter* (1850) が取りあげられる。この作品に登場する「処刑台」は、本来の目的で使用されるのではなく、「登場人物たちが新たな自己を演じ、意志を表明する場所」となっていることが分析される。夫の不在のなかで子どもを出産するヘスター、その子どもの父親である牧師ディムズデル、一足遅れてピューリタン共同体に到着するヘスターの夫チリングワースの3人が、起こってしまった罪に対して、それぞれに向きあう姿が描きだされている。明かされない秘密が3人に緊張した関係をもたらし、「言葉」は各人の内面で膨らんでいく。こうした「発することのできない抑圧された声」が、刹那的なペルソナを得る場所となるのが「処刑台」なのだが、その処刑台の「ステージ」としての役割がつとに強調されている。

第6章では、スーザン・ソントグの戯曲 *Alice in Bed* (1993) が取りあげられ、文字通り「ステージ」の上でくり広げられる「舞台空間」が分析されている。ソントグは、この戯曲で、前述のフラーを戯画化して描いている。フラーのほかにも閉塞的な状況に置かれた女性たちが登場するが、それぞれの登場人物の発する声が重なって、「ペルソナの饗宴ともいえる舞台空間」が出現する。だが、一つひとつの問題の解決を棚上げにしたまま、ソントグは舞台の幕を閉じてしまう。「そこに残された開かれたままの問いは、解放のカタルシスを実現することができるのか」をめぐって議論がなされる。その後、そうした議論を踏まえて、ソントグの歴史小説 *The Volcano Lover* (1992) の「構成」が問題にされ、「作品構成こそが作品としての声を発している」ことが分析される。そして、ここから聞こえる声も、「歴史に刻まれている男性登場人物たちから作品の中心をずらす」ことによって、新たな響きを獲得することが導き出される。さらに、最後に置かれたエレオノーラ・デ・フォンセカ・ピメンテルの短い「独白」をめぐり考察から、「小説の構成そのものが作品のテーマとなる」ことが論じられる。

第7章ではリディア・マリア・チャイルドの黒人奴隷制をめぐる物語 *A Romance of the Republic* (1867) が取りあげられ、「異人種間結婚」がもたらす問題に対する異議申し立てとして分析されている。この作品が書かれたとき、南北戦争が終わり、すでに黒人奴隷制に終止符が打たれていた。それでも、あえて奴隷制時代に物語を置くことで、根強い人種差別があることをチャイルドは訴える。黒人奴隷として扱われる姉妹、ローザとフローラは、それぞれに救済の道を模索し、自尊心と声を取りもどそうとする。「黒人奴隷であること」と「女性であること」との両面から人格を否定される姉妹が、自己に対する肯定的な意識を回復する過程は平坦ではない。それでも、白人と思い込んで育てられたあいだに身につけた教養が資産となることも否定できないことが、論じられている。

第8章ではレベッカ・ハーディング・デイヴィスの“Life in the Iron Mills” (1861) が取りあげられ、中産階級の文化の外に置かれた移民労働者の過酷な状況に入りこむ「語り手」のペルソナと、それを通して発せられる女工デボラの声が分析されている。移民労働者という言語的にも文化的にも異質な存在（デボラ）によって、「語り手」自身が新たな声を獲得していく。言葉をもたない者の「代弁者」になることは、「他者を通して自分自身を表現する」ことにほかならない。移民労働者という経済階級的な疎外に加え、女性であることによってさらに不利な状況におかれたデボラは、自発的な声を奪われた存在である。デボラの気持ちに寄りそう語り手は、デボラに声を授けるとともに、「新たな視点と言葉」を手に入れる。

第9章では、先行する各章で論じられたことを踏まえ、「精神的な融合と達成のメタファーとしての結婚」が論じられている。マーガレット・フラーの *Summer on the Lakes, 1843* と *Woman in the Nineteenth Century*、ゾラ・ニール・ハーストンの *Their Eyes Were Watching God* (1937) という、時代も作家の背景も異なるテキストが取り上げられ、かつ、並置・対照されることにより、「結婚という関係性に理想的な魂の解放が託される」ことが論じられている。まだ実現されていない理想を文学的に描くとき、結婚は言説上のメタファーとなる。女性であることによってもたらされる抑圧であるからこそ、女性であることを否定するのではなく、「精神的な自立」と「相手との一体化」を両立させる結婚が「理想の実現の空間」となる。19世紀20世紀、白人と黒人、北部と南部というように対照的な背景をもつ、フラーとハーストンの作品がともに「全人格的な存在の可能性が現れる場として、超絶主義的なイメージを結婚に重ね、理想を描いている」ことが考察されている。

はじめに

本論文の最大の評価ポイントは、一言でいえば、その「斬新さ」である。しかしながら、「斬新」なものは、往々にして「一般的な理解を得られない」ということもある。本論文も「一人の作家およびその作品群あるいは、ある文学作品を分析して論じるという、これまでに多く見られた文学関係の学位請求論文とは異なる」(荒審査委員)ものであり、「一つの原則に基づく体系的な構成をとらずに作品を取り上げて議論し、全体としての意味を読者につかみ取らせるというブリコラージュの叙述形式になっている」(有賀審査委員)がゆえに、従来の審査基準をストレートに当てはめることのできない面もある。

そこで、まず、(1)論文全体の評価を提示したのちに、(2)予備審査の段階から問題になった「ブリコラージュ」、および、論文全体に統一をもたらしている「ペルソナ」の役割について簡潔に述べる。その後、(3)2人の審査委員の見解の要約を示し、(4)口述試験について言及し、最後に、(5)審査結果を述べる。

審査結果の要旨 (全体の要約)

本論文の「目的」について述べれば、著者は終章において「本論文の目的は、女性たちがことばを発するために作りだしたロジックとレトリックを明らかにすること」であると述べている。別の言葉で表現すれば、その目的は「テキストが内在させているあらたな解釈の可能性を探りだし、弱者として規定されることを逆手にとる〔女性の〕言語的なダイナミズム〔=響きあう声〕を「浮かびあが〔らせ〕る」ことである。

こうした目的を達成するために、著者が採用する諸作家の作品の「分析方法」は、「キャンノン」の主流に位置づけられてきた男性作家による作品も含め、新たな視点から多くの作家たちの作品を読み解き、「〔諸〕作品に隠された女の声を浮かびあがらせ」というものである。そのさい、重要なのは、必ずしも通時的に年代順に諸作品を取り上げるのではなく、共時的に「女性の言説の相互関連性を探したそうと試みた」ことである。この意味において、本論文の形式はジョンソンのいう「ブリコラージュ」に従っているといえる。

この手法を駆使した著者自身は、メインタイトルにある「響きあう声」と、論文のバックボーンともいえる「ペルソナ」との関連について次のように述べている——「聞かれることのないまま、発せられることのないまま、沈黙を強いられてきた女のことばを文学テキストのなかに探りだし、登場人物たちや語り手のペルソナにあらたな意味を見出すことによって、それぞれに生みだされた作品がつながり、それらの声が共鳴しあう」。

問題は、「著者の目的が首尾よく達成されている否か」である。答えは「イエス」であるが、その一因は「ブリコラージュ」(包摂的分析)という手法を駆使したことにある。

「内容の要旨」でも書いたことだが、本論文における議論は、「ブリコラージュ」という手法を駆使するがゆえに、一直線的な展開をしているわけではない。それゆえ、本論文を論述の統一性という視点から見た場合、「議論に一貫性が見えない」という批判を招来するかもしれない。一方で、このことは予備審査でも指摘された問題である。しかしながら、他方で、この論文全体が「ブリコラージュ」という手法に基づく論述であるとみなせば、議論の展開方法に問題はない。この手法の駆使は、予備審査でも理解が得られたところであるし、本審査では、かえって、この手法が高く評価された。「ブリコラージュ」という手法の駆使が功を奏した、といえよう。

また、「ペルソナ」という概念によって、一見「一直線的な展開をしていない」と思われる、論文全体の「議論の整合性」は十分に読み取ることができる。さらにいえば、メインタイトルの「響きあう声」、およびサブタイトルの「女性の表象と抗拒の言説」という事柄も、「内容の要旨」における「議論の流れ」で書いたように、説得的に示されている。

以上のように、論文の「斬新さ」と「目的の達成」に加えて、先行研究のフォローや註をふくめた論文の全体の構成は、博士論文としての要件を十分に備えている。また、審査委員が疑問に思った点、ならびに、議論が不足していると思われた点などについては、口述試験において質問した(「口述試験の結果」参照)。

審査結果の要旨 (2人の審査委員による総合的論評)

(1) 「アメリカ史」を専攻する有賀委員による総合的論評(原文から抜粋、文章は原文のまま)

論文からは、個人の尊厳が平等に扱われる差別のない社会を達成しようという著者の熱意が伝わってくる。が、それ以上に著者が数多くの文献を丹念に読み考察し、新たな洞察を加え、それを著

者が最も適していると考え形式でまとめあげ、男性中心社会における制約と抑圧の中で「女性たちがことばを発するために作りだしたロジックとレトリックを明らかにすること」に成功している。

本論文は、複数のアメリカの文学作品をフェミニズムの視点から解体し、作品に登場する女たちの潜在的な意思つまり声を探り、それらの声を時間空間を超えた形で並べ「響き合」わせ、つまり共鳴させて、女たちの新たなペルソナを再構築していく、いわば脱構築の研究と言えるだろう。研究成果を表現した論文の形式も、脱構築の手法をとっている。論文は一つの原則に基づく体系的な構成をとらずに作品を取り上げて議論し、全体としての意味を読者につかみ取らせるというプリコラージュの叙述形式になっている。それによって、文学が登場人物のペルソナを形成する自由な場、つまり「イマジナリー・ドメイン」であることを効果的に示そうとする。ペルソナの形成においては、作品を作家から読者の手に引き渡すバルト等のいう「作家の死」の立場に立ち、読者としての著者自身の解釈に基づいたペルソナを浮かび上がらせる。

以上のような理解に従って論文を読むと、「男性中心の社会において抑圧され制約された女性たちがどのような声を発し（あるいは内に秘め）、自分たちの主体性を確立しようとしてきたか」を示すという著者の論旨が明快に伝わり、著者の深い考察を共有することができる。一方、ポストモダンの脱構築主義を共有しない者が読むと、著者の議論は感覚的には納得できても論理的には何かすっきりしないところがあるかもしれない。

しかし、これは論文の問題というより、歴史研究者である私自身の問題である。すなわち、多文化主義やジェンダーなどポストモダンの視点からの分析は行うが、論文の叙述に関しては近代的（一般的）な、一定の原則（因果関係、カテゴリー、時系列など）に基づく体系的な構造をとるようにしてきた。これは読者に論文の意図をそのまま分かりやすく伝えるためである。

本論文は分析だけでなく表現形式もポストモダンであり、とくに文学以外の学問分野に根強い近代主義への全体的な挑戦と言える。ここで、論文とは何か、何を目的とするのかといった根本的な問題を提起することとなる。

文学の専門家ではない私には、論文が取り上げている各作品の分析に関しては、専門家の先生方に委ねたい。しかし、論文が分析や議論に使う概念（フェミニズム、アイデンティティなど）や使用言語に関しては、私の研究にとっても中心の問題なので、本論文を大雑把な感は否めないが全体的に評価したい。

紙幅も限られているので、本論文と関係の深い「フェミニズム」について、一つだけ、著者の視点をいわば補足する意味で私見を述べたい。

著者は、セクシュアリティの多様性が受け入れられる傾向にある現在、男と女の二元的なカテゴリーを前提として始まったフェミニズムは極端に言えばもはや意味をなさないとの批判にふれ、しかし男性中心の社会が機能している今もフェミニズムの役割が大きいと述べる。これは男女の二項対立の中で女性の抑圧を提示した1960年代頃までのフェミニズムを固定化している感がある。フェミニズムが1970年代頃から大きく変化してきたことを議論に織り込んでいないように見える。あえて単純化して述べれば、フェミニズムは多文化主義の影響ないし攻撃を受け、その主張は女性の権利や人権から多様な人間の人権の尊重へと進化した。そして政治的経済的な権利だけでなく身体やセクシュアリティの権利を主張の中に包含するようになった。未だ男女の平等が達成されていないことだけがフェミニズムの存在理由ではない。むしろ、今日のフェミニズムがグローバル化時代さらに顕著になった人間の人種、民族、地域、性など全ての属性の多様性を尊重し全ての人間を抑圧から解放する理論および主張として有効だからである。

†

(2) 「アメリカ文学」を専攻する荒委員の総合的論評（全文、文章は原文のまま）

本論文の特徴は、一人の作家およびその作品群あるいは、ある文学作品を分析して論じるという、これまでに多く見られた文学関係の学位請求論文とは異なり、一つの分析理念を掲げ、それによって文学作品・文学行動を解釈しようとするもので、きわめて画期的・挑戦的であり意欲的な論文である。

アメリカ文学における女たちの声を探り、その「抗拒」の声の分析を、ドゥルシラ・コーネルが唱える「イマジナリー・ドメイン」という想像・創造の場を前提にして論を展開していく。コーネルによれば、女たちには法的に、男たちと均等の権利が与えられてこなかったのであり、自由・平等を求める闘争、すなわち自己のアイデンティティを確立する闘争には、「自分を変える自由」を実現する空間を作り出す必要があると言う。そこでコーネルは、「ペルソナ」という概念をこれまでとは違った意味をもって持ち出してくる。それは人格を覆い隠す仮面（マスク）ではなく、開か

れたもので自由へ広がる契機となる。もともと人格の語源であった「ペルソナ」であり、「仮面を通り抜けて輝くもの」であると見なす。「ペルソナ」とは、自己信頼の回復の場になり、「イマジナリー・ドメイン」を形成し、自由に声や思いが発現する領域となる。その領域こそが文学空間である。

この考えを応用して、まずアーネスト・ヘミングウェイの遺作とされる『エデンの園』が分析される。

遺作を取り上げることに疑念を抱いていた評者だが、ロラン・バルトの「作家の死」理論が援用され、意味を固定しない、「テキスト」の「パフォーマティヴ」性に注目して、本論文の著者がこの理論を十分に咀嚼していることは、高い評価に値するところである。1970年代半ば以降、文学研究の世界を席捲したさまざまな理論（セオリー）を、そのままあてはめるのではなく、それを批判的に参照しながら、自分の「セオリー」として文学作品の分析に利するその扱いかたは圧巻である。

遺作の分析にあたり、ヴォルフガング・イーザーの「読者の役割」理論をさらに展開し、遺作を編集する作業に携わる者が「加工」することによって、「イマジナリー・ドメイン」が広がり、登場人物の「ペルソナ」が変化しうることが指摘される。もはやそれはいわゆるヘミングウェイ文学から外れることにもなるのだが、ヘミングウェイが遺した文章が、編集作業を通すことによって新たな「テキスト」になり、読者にそれを楽しむ場を提供してくれることになる。遺作が新しい文学空間、「イマジナリー・ドメイン」を生み出すことになる。このように遺作の読みかたに新しい光が当てられたことは、評者にとっては目から鱗が落ちるような、嬉しくも頼もしい文学的体験であった。

編集作業によって、女主人公キャサリンが自己表現を求めるようになったがゆえに、キャサリンはヘミングウェイの「基本設計」を越えた複雑な存在となる。そのキャサリンが自己制御を失う過程は、まさに私たち読者に「イマジナリー・ドメイン」を用意してくれることになるという指摘は、文学の広いありかたを示唆するものであり、注目に値する。

ただしこの章の結びの文章が、キャサリンを「女性の役割につきまとう背反性を象徴」しているとして、キャサリンは「狂気においやられて、しかも正気」であると簡単にまとめられているのは物足りない。まさにそこに女の表現・自立・自己アイデンティティの確立の厳しさがあるのであって、「イマジナリー・ドメイン」の広がりとは「ペルソナの輝き」があるのだろう。狂気と正気を併せ持つことになる女の表現作用が、論文の表題の「抗拒」と強く結ばれているものと思われる。

第3章のナサニエル・ホーソーン『大理石の牧神』では、アメリカ文学のキャンオンを築いた作家を扱いながら、一般にもっとも論じられている傑作『緋文字』を第一義的に扱うのではなく、この作品をまず取り上げたことの意味は何だろうかと思わせた。

アメリカの東部ではなくローマという舞台、プロテスタンティズムではなくカトリシズムの世界を背景にするこの作品は、かならずしも肯定的な評価ではなく、否定的な評価をもって分析されることも多い。そのような作品をあえて考察対象に選んだところに、実は「イマジナリー・ドメイン」の広がりを見る著者の意図があると思われる。

相反する資質の持ち主である、それぞれ男女の二組を登場人物とするこの作品において、作者ホーソーンは最終的な結論を書き記してはいない。けれども四人それぞれの苦悩を通して、「イマジナリー・ドメイン」におけるペルソナの展開を追い、「ピューリタンの娘」としばしば形容される登場人物の一人が、結局は、一九世紀ニューイングランドの体制と規範のもとへ戻っていく過程こそ、女の自己同定の困難さを示していると、本論文の著者は主張したいのであろう。

ホーソーンがしばしば意識的であった「原罪」の問題がこの作品では問われていると思うが、「幸運な墮落をヒルダが即座に否定したことこそ、女性役割の理想的な実践者」であることを示しているという指摘は、ヒルダが芸術にかかわりながら、模写に終わっていることとつながっている。結局は、一九世紀の規範にのっとり、近代主義・理性主義を尊ぶ男との結婚へ自分の人生を求めるヒルダのペルソナの展開とその分析をなお深めると、「イマジナリー・ドメイン」の意味がより明らかになったであろう。

さらに、一九世紀の文学作品の分析においてしばしば問題にされる、「マインド（精神）」と「ハート（心）」の対立関係に言及しながら、四人の登場人物の歩みを詳説すれば、より一層の作品理解に役立つ論となったのではないか。

もう一人の女の登場人物ミリアムの言葉の引用（48頁）は、社会通念にとらわれない作家ホーソーンの、女の自立を認める姿勢をはからずも表明している。この発見もまたこの作品における「イマジナリー・ドメイン」の広がりを認識させるものであった。

マーガレット・フラーの代表的著作である『一九世紀の女性』は、難解なことでもよく知られているが、女たちの苦悩の声の代弁をするには、きれいに筋道だった物語はありえない、という主張は十分に納得のいくところである。「規範の解体」こそフラーの「文体」であると主張する。

これは今日のアメリカを代表する作家トニ・モリスンの姿勢にもつながる。モリスンは、奴隷制度のもとにおかれた奴隷たちの非・人間的な体験を文学作品に昇華するとき、読者を立ち止まらせ、思考する機会を与えるためにも意図的に難解な物語にしているのだと語っている。初めと終わりがある筋道だった物語では、奴隷の苦悩は語れないのである。

一九世紀の作家・思想家たち、たとえばホーソンやエマソンなどに、きわめて大きな知的影響を及ぼしたマーガレット・フラーの存在理由、その意義はこれまで十分に認識・評価されてこなかったといえるだろう。そのフラーの言葉が紹介されるとき、私たちはあらたにフラーが、ゆたかな「イマジナリー・ドメイン」を提供してくれていることに気づくのである。

当時のアメリカにおいて、あるいは今日までつづいているともいえるが、「先住民問題」は、奴隷制度の問題と並んで建国の父祖の頭痛の種であった。フラーは、先住民の劣等性を文明の欠如と見なす一般的な考えに抗い、「白人の文化や社会も矛盾に満ちている」と語る。また著者は、R・W・B・ルイスのアメリカ人を「アメリカン・アダム」＝無垢なる存在と見なすこれまでの文学研究伝統に反して、旧世界にこそ自由の実現の可能性があるというフラーの言説を引用してくるが、それでもフラーがアメリカへの希望を抱いていたと指摘し、フラーの柔軟な思想を是としている。

男と女は「相互に行き来している」のであり、「男女の対等の関係が実現不可能なものではない」とフラーは説いていると著者は述べる。「互換が可能ほど男女が個人として成長すること」の必要性を説くフラーの文章に接しながら、読者は「イマジナリー・ドメイン」のペルソナの輝きを体験する。

第5章の『緋文字』を扱った章は、この論文の中で弱かった部分である。「イマジナリー・ドメイン」とのかかわりから、処刑台の場面を論じようとしているのかどうか、不透明であった。主人公ヘスター・プリンを論じるのであれば、サクヴァン・バーコヴィッチの評論『緋文字の役割』（1991）に言及せねばならないだろう。

ふたたび「イマジナリー・ドメイン」の視点からこの論文の強みとなるのは、第6章のスーザン・ソントグによる『ベッドのアリス』を分析した箇所である。

ここではソントグの「キャンプ」論を取り上げている。女たちの「抗拒の言説」を追うこの論文において、ポスト・モダンの時代である今日の文学を論じるにあたって、「キャンプ」はきわめて有効な補助線になるだろう。ただしソントグの「キャンプ」の定義は難解である。さまざまな表現を使って著者は「キャンプ」を説明しているが、それでもわかりにくいところがあり、一般に「キャンプ」によって読者の間にどのような理解があるのか、踏み込んだ説明が必要であったかもしれない。その点がやや欠けていると思われ、読者には不親切なところがあった。

それでもソントグの『ベッドのアリス』という作品じたいを、「イマジナリー・ドメイン」そのものであるとすることは、この作品解釈において大きな意味を付与することになった。作品選択に関する著者の鋭い感覚が高く評価される。引用されている研究者のこの作品における主人公は、「一人であり、だれでもなく、そして10万の女たちになる」（90頁）という指摘こそ、「イマジナリー・ドメイン」の複層的要素、肯定的また発展的資質をあらわしているだろう。

その他リディア・マリア・チャイルド、レベッカ・ハーディング・デイヴィス、ゾラ・ニール・ハーストンなどの作品が取り上げられる。一九世紀および二〇世紀にわたる作品群、舞台となる合衆国での地域の幅、および作家の、あるいは登場人物の「人種」の違いなど、一見、アト・ランダムに選ばれた作品群に映るが、その選択に必然性を感じさせるのは、著者が「イマジナリー・ドメイン」「ペルソナ」を基本概念として、ぶれずに論を進めているからである。結論における「記号としてのシニフィアンが作り出す意味としてのシニフィエが一つの固定した終着点を持たないのと同様に、物語も永遠に動的なままである」（138頁）という著者の文学解釈における姿勢こそ、この論文の強靱さを物語っている。幅広い文学空間を縦横に動き回る、その自由な論の展開に文学の持つ力強さが感じられた。

この論文はさまざまな作品を通して、文学的思考を展開したものである。本論文著者の視点は斬新であり、読者の一人である評者もまた取り扱われたさまざまな作品に対して、あらたな読みを教示され、「文学的興奮」を味わった。

口述試験について

口述試験では、審査委員が疑問に感じた点、論文では十分に議論されていないと思われる点を質した。すなわち、(1)「文学研究の論文とは何か、その目的は何か」という問題、(2)「ブリコラージュ」に関連する問題、(3)「作家」の存在意義、(4)「フェミニズム」の意味、(5)「アイデンティティ」の意味、(6)「使用言語」についての疑問、(7)「キャンプ」の説明、(8)「抗拒」という言葉を使用した理由とその意味、(9)『緋文字』の処刑台と「イマジナリー・ドメイン」との関係、(10)『大理石の牧神』のヒルダやミリアムの描写にいかなるイマジナリー・ドメインが提示されているのか」という問題、(11) ジュディス・バトラーの近年の著作のフォローをめぐる問題、(12)「文学」と「現実」との関係、(13)「脱構築の」限界、(14)「脱構築」の妥当性などをめぐって、活発な質疑応答が展開された。

伊藤氏は、おのおのの疑問・指摘に対して、自分の意見を明確に披瀝し、論文で述べていないことも補足した。その結果、「伊藤氏は、口述試験において、全体として自分の主張を護ることができた」と判断できる。

審査結果

以上に述べたすべてのことを踏まえて、本論文は、審査委員4名の全員一致で、「本審査に合格した」ものとする。

公表予定

日程	平成 年 月 日
公表形態	①掲載誌名：【 】【 】号・巻 【 】頁 【全文・要約】
	②単著（発行者）
題目	<※タイトルを変更した場合>